

令和5年度 県立水戸第一高等学校附属中学校自己評価表

目指す学校像	○真理を愛する学問第一の校風の下、質が高く、活気ある授業や課題研究、社会と連携した教育プログラムを展開する学校 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、生徒が何ごとにも主体的に取り組むとともに、中高・学年の枠を超えて切磋琢磨する学校 ○至誠一貫・堅忍力行の校是の下、豊かな人間性や最後までやり抜く力を育むとともに、高い目標に挑む生徒をしっかりと支援する学校			
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
【成果】 令和4年度の重点項目に関する10の重点目標の達成状況は、すべてBであり、総括的には目標を達成できたといえる。令和5年度入学者選抜における本校の志願者数は289名であり、地域の期待の表れととらえている。科学の甲子園ジュニア茨城県大会には2チーム出場し、うち1チームは県代表として全国大会に出場するなど、各方面で活躍することができた。特別活動(学校行事・学級活動・委員会活動・体験型部活動など)については徐々に中高の連携が取れるようになってきており、附属中学生徒会も発足した。様々な活動を通して生徒に自覚が生まれてきており、今後につなげていきたい。 【課題】 特別活動や授業等において、教員、生徒ともに中学と高校の交流を図り、より充実した教育活動の実践を推進するとともに、6年間を見据えて切れ目のない指導体制を構築していくために、より具体的な方策を検討していく。くわえて、高校進学後をにらみ、成績下位者への対応について検討していく。		教育課程・学習支援の改善・充実(中高連携・教科横断での授業改善等)	① 中高連携・教科横断で授業改善を図り、生徒の授業満足度(90%以上)を向上させる。	A
			② 生徒全員がICT端末を有するBYOD環境の下、教育・学習活動におけるICTの有効活用を図る。	A
			③ 科学の甲子園ジュニアをはじめ、他校生と切磋琢磨する「他流試合」への参加を奨励し、活躍を支援する。	B
		進路支援の改善・充実(キャリア教育の推進等)	④ キャリア教育を推進して進路意識を高揚させるとともに、高校と連携し難関大学や医学部医学科をはじめ生徒の第一志望実現を支援する。	B
		中高・学年の枠を超えた活動の推進(「+4学年活動」等)	⑤ 附属中学校の完成を踏まえ、+4学年活動など中高連携での活動や特別活動の改善・充実を図るとともに、体験型部活動を推進する。	A
		健康・安全の確保と法令遵守の徹底(相談環境の整備等)	⑥ 最後までやり抜く力の育成や教育相談環境の整備を図るなど、生徒の心身の健康・安全を確保する。	B
			⑦ 業務改善を進め、職員の心身の健康・安全を確保するとともに、法令遵守を徹底し、違反件数ゼロを目指す。	B

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○古典の学習の際、漢文の訓読や古文の活用、助動詞など先取り学習を行うことができた。 ○高校進学や大学入共通テストにおける読解力や語彙力の必要性を伝えた。実際の入学試験でどのようなパターンで現古漢を用いるかなどの説明をすることで、具体的な将来を考えさせた。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○ICTを活用することで、論理展開における共有の時間が作文指導やスピーチ指導などで授業改善を図れた。 ○Scratchで作成されたもので漢文の訓読を練習させ、生徒たちに意欲的に学習へ向かわせられた。 ○欠席者への板書事項としてスライドを配信したり、誤答分析の解説スライドの配信をすることで、補習として活用できた。 ○小テストをフォームで行い、即時誤答分析をさせられた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○共通して担当する学年において授業の内容や方向性などの共通理解を図るための話し合い、相互の授業参観や進度の確認と調整を行った。しかし後学期に入り、なかなか互いの授業を参観するなど、研修の機会があまり図れなかった。
		論理的に自分の考えを表現する力を育む生徒を育てる。	○授業の振り返りや解説を通して、適宜添削指導を実施し、文章読解力と表現力の養成を図る。 ○共有七箇条などの観点や文型を活用し、考えを整理しやすくする。	B	B	○60分授業を生かし、短文(80字以内)によるふりかえりの時間の確保に努めることができた。 ○どの学年も、生きたデータを活用し、実際の社会課題に関するテーマで作文を書く指導を適宜行った。クラッシーノートやスプレッドシートの活用を通して、他者との意見交流をする機会を増やし、相手にも伝わる内容かどうか、互いに指摘・助言することに重点を置いた指導ができた。
		基礎学力の定着を図り、段階的に全国学力学習状況調査に対応できる基礎学力の養成を図る。	○授業方法を工夫改善し、指導方法に対する研究を深めていく。 ○導入での漢字や語彙指導、中間の教科書主体の学習、終末の振り返りや問題演習と、60分間を3つのパーツに分け、見通しを持たせた学習を行う。 ○小テストや暗唱等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領に対応できる基礎学力を培う学習指導の在り方について検討を進める。 ○希望者に向け、放課後補講やテスト解説を行う。 ○辞書や副教材等を利用し、学習内容の活用を図る。	A		○作文指導はスプレッドシートや共有七箇条(根拠と主張のずれを防ぐルール)、一人ディベートの活用により添削指導を実施し、表現力への指導を充実できた。繰り返し、行っていた。 ○小テスト、暗唱ともに位置づけてできた。合格するまで繰り返し指導したり、間違い直しを徹底させた。 ○誤答分析の解説を放課後に行ったり誤答分析のスライドをクラスルームに挙げたりした。テスト前の補講を数回、希望者に行った。特にフォローアップ講座では、全学年に対してしっかり時間を確保しながら解説を行えた。 ○雑誌にも紹介した、部首物語や熟語クイズなど、意欲を高める語彙指導を充実させることができた。
		中高一貫教育校の特色を生かした授業を展開できるような教育課程の工夫改善を行う。	○実生活に結びついた必然的な課題の設定や目指す身に付けたい力の提示を毎単元心がけると同時に、グループでの話し合いの学習時間を充実させる。 ○高校教員の授業参観や高校入学までに育成すべき力や実態、教科書などの情報共有をすることで、授業の工夫改善を図る。	B		○授業での学びが実生活のどこに生きてくるかを導入でできるだけイメージを持たせるように心がけたり、総合的な学習との関連を活かした課題作りに努めた。特に、3年生では「情報をまとめて作品集をつくる」という題材で総合で作成している論文を取り上げた。 ○高校教員との情報交換の中で、身に付けさせていく力の順番において若干の齟齬が生じたので、次年度以降改善していきたい。
社会	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○中学校で習得した知識・技能を活用すれば取り組むことができる大学入試問題の演習などを通じて、中高連携および進路意識を高めながら授業を展開することができた。また、第3学年において、出題意図を生徒に明確に伝えることで、生徒の課題意識の醸成、自主的な目標設定を促した。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○60分授業を生かして、単元のまとめの活動の充実に力を入れるとともに、多面的・多角的な問い返しなど思考力・判断力・表現力等を活用する時間を設けるように努めた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○中学教科内での打ち合わせや教科会において、社会科における60分授業を活用した中高連携の在り方について検討できた。
		綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、高等学校地理歴史科および公民科への円滑な接続を図るための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本の学力定着を図るとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○標準単位数を超えた授業時数を生かして、学習した内容を踏まえたプレゼンテーション発表などを実施することで、生徒が多面的・多角的に思考・判断し、表現できるようにする。	B		○標準単位数を超えた授業時数を生かした単元構成を工夫することはできたが、授業時数減への対応にやや課題が残るので、次年度に生かしたい。 ○論述課題の設定やジグソー学習などを取り入れるなかで、多面的・多角的な思考を促す授業実践を行うことができた。
		教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B		○多様な側面から学習評価を行えるように努めた。 ○単元テストにおいては、思考力・判断力・表現力の評価問題について、近年の教育動向を踏まえた作問を心がけた。 ○ICT機器をより効果的に活用できるように実践を重ねる。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
数学	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	C	B	○中学3年生から高校1年生への接続の部分で、学習進度や内容に調整が必要だと感じる。ここが定まれば、中学1年生、2年生についても逆算して指導を行うことが可能となり、より進路意識を高揚させる指導を行うことができると考える。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○60分授業を生かし、要所でグループ活動を取り入れることで、自分の考えを他者に伝えたり、他者の考えを取り入れたりする指導を行うことができた。 ○タブレットや電子黒板を活用して、模範解答のみならず他者の別解にも触れることができ、多面的な考え方についての学習指導を行うことができた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○研修という形ではないが、授業進度の細かい打ち合わせをする中で、指導方法についても共有することができた。
	主体的に数学に取り組む態度を育成し、知識・技能の定着を図る。	○予習復習を励行し、教科書内容や基礎力の定着を図る。 ○課題や宿題について、タブレットを活用して課題の取組状況や習熟度の共有を図り、自発的に取り組む意識づけを図る。 ○担当者間の連携を密にし、日常生活に結びつく教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、対話を通した授業で多様な見方・考え方を共有するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。	B	○教科書に準ずる問題集で本時の学習に該当するページや問題を提示し、予習－授業－復習のサイクルにより定着を図りやすい学習の流れを確立できた。 ○課題や宿題の状況を電子黒板の画面上で確認をし、自発的に取り組む意識付けを図ることができた。 ○高校につながる発展的な問いや実生活に即した問いを適宜取り入れ、数学の活用の可能性を見だし、生徒の興味・関心や意欲の喚起を図ることができた。また、生徒の多様な考えをうまく拾うことで、様々な見方・考え方を共有できた。		
		数学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう授業展開を工夫し、進路実現のための学力向上を図る。	○学力調査や大学入試の傾向に合わせて、単元テスト・実力試験の問題精選を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○記述式の解答機会を適宜設け、解き方の過程や考え方を伝える力を付ける。 ○疑問や新たな気づきをもたせる問いを設定し、生徒同士の学び合いや話し合い活動を充実させることを通して、新課程による大学入試に対応できるような説明する力を付ける。	B		○単元テストで授業や問題集での学習の定着度を図る問題を精選するとともに、再チャレンジの機会を設けたり、結果の分析から類題での反復を繰り返したりする指導を継続することができた。 ○基本的に記述式の問題が多いので、記述の仕方に関する指導を多く行った。 ○教科書の問いに対して条件を変える発問をすることで、解き方の暗記ではなく様々な変化に対応する考え方を身に付けさせる指導を行った。
理科	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	○中学指導要領の範囲にこだわらず、体系的を重視した授業を展開することを通して、科学本来のおもしろさを追求しながら、興味・関心を高めるよう支援している。今後も、引き続き専門性を生かし、高いレベルの科学をやさしく学ぶことのできる授業の展開を目指していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○授業最後の5分間を利用したFormsでの振り返り「本時の成果」を継続することで、的確に生徒の知識定着度や疑問点を把握し、次時の授業構成に役立てている。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○年間を通してT2を含めた相互授業参観を行い、指導方法の改善に取り組んでいる。専門性を生かした授業の構成を続けるため、各学年4単位を2単位ずつに分割した授業を、来年度も継続していきたい。
	知的好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について探究し、科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、演示・生徒実験を多く取り入れる。 ○デジタル教科書や、デジタル図説を駆使して授業展開をするなど、デジタル教材を活用して、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○担当者の専門性を生かした授業展開を行うことで、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	A	○演示実験・生徒実験は年間で20回以上は実施出来た。生徒が主体的に実験に取り組めるよう題材にも工夫をし科学的に探究する姿勢を育成できた。 ○今年度は生徒用デジタル教科書の使用ができなかったため、演示によるデジタル教材の活用が主となったが、動画コンテンツやシミュレーター等を効果的に活用して授業を展開することができた。ICTサポーターと連携して、Chromebookでのシミュレーター活用なども模索していきたい。 ○担当者の専門分野を生かした授業展開は効果的だった。今後も継続させていきたい。		
	確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○単元テスト・実力試験の問題の精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○記述式の解答機会を適宜設け、解き方の過程や考え方を伝える力を付ける。 ○疑問や新たな気づきをもたせる問いを設定し、生徒同士の学び合いや話し合い活動を充実させることで、相手に説明する力を付ける。	A	○テストの問題は、基本から応用、大学入試問題等も取り入れることで生徒の意欲をかきたてることが出来た。また、学習の定着度が低い生徒には、補講を実施し苦手意識を克服できるよう配慮した。 ○授業の中で生じた疑問を、生徒が自主的に調べ、それを発信し、生徒同士が学び合える機会を設けたことで、学びが深化していく場面がうかがうことが出来た。		
		中高一貫教育の理科教育の在り方、評価方法、新学習指導要領の研究を進める。	○新学習指導要領に対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○校内試験や実験レポート、毎時間の学習の振り返りなどの評価への生かし方についての研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○学習指導の在り方や評価の在り方について、教科会等を通じて高校の先生と協議し、実際の評価に生かすなど本校の理科教育の発展を目指し、連携し合うことが出来た。今後は内進生の様子を参考に、中学での学習を振り返りながら再構築していきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
音楽	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	A	○生徒が学習に主体的に取り組めるよう指導の手立てを考えたが、進路意識の高揚にはつながっていないと思う。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○授業の進度は昨年度より下げて丁寧に譜読みをしたり練習時間を長くしたりしたのでしっかり表現できる生徒が増えた。 ICT機器については動画編集や鑑賞教材などでは多用している。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A		○60分間ずっと練習するという状況にならないよう楽典的事項の指導を織りまぜるなど中学生の体力や気力に合うよう時間設定を工夫した。
		主体的に音楽に触れることで芸術に対する感性に気づき高める意識・態度を育てる。	○多様なジャンルの音楽や音素材に触れる機会を増やし豊かな感受性と表現する力を育む。 ○主体的に音楽に関わる態度を育て、音楽をはじめとするさまざまな芸術に対する関心・意欲を高める。	A		○生徒ひとりひとりが自分の好きな曲を発表するという時間を設けることで様々なジャンルの音楽に触れることができた。私も生徒の好みなどが理解できて参考になった。今年度は主に鑑賞での活動となったたが表現の活動としても取り扱いタイト思う。
		音楽を表現する様々な方法に気づき、自分の感性を活かした表現をめざす。	○歌唱・器楽・創作・鑑賞の各分野を偏りなく指導し、それぞれのつながりを感じながら表現する態度を育てる。 ○発表の場を設けることで他者の表現なども参考にしながら個性豊かな表現を工夫する意欲を高める。	A		○歌唱・器楽・創作・鑑賞の全てを指導できた。その活動同士のつながりはもう少し工夫が必要だと思う。創作したメロディは全グループの作品をつなげて「クラスの曲」としてまとめたのが生徒には好評だった。
		音楽を理解しよりよい表現につなげるための基礎的な知識を得る。	○音楽の諸要素(形式・構成・音色・リズム・速度・旋律・テクスチャ・強弱)について学び理解を深めることでさらに豊かな表現をめざす。 ○基本的な唱法・奏法・創作の知識を身に付け、豊かな音楽表現をめざす。	A		○音楽の諸要素については指導のたびに触れ知識だけではなく実際に表現につながるよう配慮した。表現のための経験値に個人差があるため基本をしっかり指導するよう心がけた。
美術	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○発達段階に寄り添った指導を展開しているが、生徒の興味・関心に適切にアプローチできているか、さらなる研究が必要である。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○黒板での板書はせず、100%モニターでの資料、課題提示により、わかりやすい展開ができているが、さらに充実した資料作成に努めたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○授業時間が多く、他教科からの指導法などの研修時間は少なかった。芸術科内、また技術家庭科とも連携し、実技教科の指導研究を増やしていきたい。
		鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○生徒の興味、関心を持たせるため、より多くの作品に接する機会を増やし、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせるとともに、ものを見つめる目を養い、そこから真実を発見しようとする態度を身につけさせる。	A		○県主催の「文化芸術体験出前鑑賞講座」や、茨城県近代美術館での鑑賞会を実施するなど、本物を見る機会をつくることができた。感想文で振り返りもできて、例年に無く充実した鑑賞活動ができた。
		自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、段階的に工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○自分の表現を発表する機会を増やし、その表現を生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。 ○美術館鑑賞を計画し、本物を鑑賞する。	B		○中学3年生の授業展開をつくるために時間をかけ教材研究に取り組んだ。さらに充実した展開を研究していき、生徒の実態にあったバランスのとれた展開を研究していく。
		新たな教材研究に努める。	○新しい展開を生むための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの実演、指導ができるよう努める。	A		○教材研究を日々おこなうことで、新しいアイデアを取り入れながら展開できた。参考作品づくりを日常的にすることで、生徒のつまづきなどにも気づくきっかけになっている。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
保健体育	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が教え合うこと学び合うことを促進したい。進路実現に向けて体力面からも積極的アプローチしたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○体育館の工事の終了に伴い、体育用品の安全な保管場所の確保が可能になり、器械運動や球技に必要な用具を揃えることができるようになった。昨年まではできなかった授業展開が可能になったため、今後も充実させたい。 ○引き続き、振り返りで活動の記録、技の習得のため動画撮影に加え、ダンスの授業で活用し、生徒の意欲を高めることができた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○研修会への参加や教科会を通じて授業方法の改善を図り、生徒の主体的活動の契機とした。ICTの活用についての事例や持久走に関する安全確保についての検討などの研修ができた。
		自己の体力を把握させるとともに、健康や運動に関する意識を高める。	○昨年の体力テストの結果を反映し強化が必要な分野(柔軟性・瞬発力)について、体育授業のW-UPで、毎時、ストレッチや補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力の向上を図る。 ○投動作の強化向上を図るため、教具を工夫し、練習の機会を設ける。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	A		○準備運動で、ストレッチやダンスなどを取り入れて、弱点補強を行ったり、個人の体力アップチャレンジカードを活用して、自分に合った体力向上の取組を設定したりした。今後も、実践へとつなげる事が課題である。 ○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、健康面への配慮を念頭におきながらも体力の向上を図っていききたい。加えて、生徒の実行委員を組織して、3学年縦割りでの校内持久走大会を計画、実施できた。
		授業時のケガの防止に努める。	○運動時の安全に配慮した場の設定等を計画的に行いながら、ケガ防止のためにの正しい動きを身に付けさせる。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、コロナ対策、熱中症対策、交通安全に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	A		○本校の特性や、各学年の実態に合わせて、基礎体力の養成や基本スキルの習得に重点を置き、各種目領域で取り組んだ。教具やルールを工夫して、ケガ防止に努めた。 ○ガイドラインや保健厚生部の基準を守りながら、感染症の予防に努めた。保健分野の授業内容などを生かして、健康や衛生的な生活を目指したり、養護教諭と連携して、健康で安全な生活に向けた取り組みがなされた。
技術・家庭	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○本校の特性や、各学年の実態に合わせて、基礎体力の養成や基本スキルの習得に重点を置き、各種目領域で取り組んだ。教具やルールを工夫して、ケガ防止に努めた。 ○ガイドラインや保健厚生部の基準を守りながら、感染症の予防に努めた。保健分野の授業内容などを生かして、健康や衛生的な生活を目指したり、養護教諭と連携して、健康で安全な生活に向けた取り組みがなされた。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○本校の特性や、各学年の実態に合わせて、基礎体力の養成や基本スキルの習得に重点を置き、各種目領域で取り組んだ。教具やルールを工夫して、ケガ防止に努めた。 ○ガイドラインや保健厚生部の基準を守りながら、感染症の予防に努めた。保健分野の授業内容などを生かして、健康や衛生的な生活を目指したり、養護教諭と連携して、健康で安全な生活に向けた取り組みがなされた。
		生活と技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能の習得を目指す。	○小テストを定期的に行い、基礎的な知識の定着を図る。 ○必要用具が1人1つ行き渡るよう整理し、全員が十分な実践的学習時間の確保を目指すことで、基本的な技能の習得を図る。	B		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。
		衛生面や安全面に留意し、体験的な活動から実践的な力の定着を図る。	○実習室や使用する用具の管理を徹底し、安全に製作や実習、実験などの活動ができるようにする。 ○状況に応じ安全を考慮した上で、より多くの体験的な活動ができるように努める。	A		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。
		生活や社会の中から問題を見だし、よりよい生活へ改善しようとする意識の向上を目指す。	○グループ活動やペアワークを取り入れ、学んだことを生活の中で活用できるように努める。 ○自らが日々の生活の中で、主体的に課題発見と改善策考案を模索し続けられるように、ICT活用だけでなく、より体験的な学習の場の提供を目指す。	A		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。
						○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を目指し、思春期における自己理解を促す取り組みを進めることができた。 ○ねらいの達成のために、外部講師を有効に活用し、講演会等を行うことができた。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
外国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	4 技能をバランスよく支援することで、生きて使える英語の習得を目指して授業を構築して、支援を行っている。次年度に向けて、より実践的な力が身につくように場面設定を意識した言語活動を取り入れていく。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		現在行っている習熟度別授業を継続し、授業内容の充実を図っていききたい。基礎基本の定着をしっかりと行うことで、英語力の土台を作り、自信をもって英語を使えるように支援していききたい。ICT機器の活用については、より効果的な活用について研修を進めていききたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		お互いの授業参観を通して、研修を進めてきた。今後はより具体的な目標をもって研修を進めていききたい。
		実践的な活動を通して、場面を想定したコミュニケーションをとるための基本的な知識と技能の定着を目指す。	○基本的な表現の理解を深めるために、授業時間内に場面を想定した活動の時間を十分に確保することで、知識の定着を図る。 ○授業内容ごとに自作プリントを作成し、基礎基本の定着を図り、言語活動における表現力の向上を図る。	A	B	授業内容に応じた自作プリント(内容理解、例文練習、文法練習、単語練習等)を作成して、授業内で適切に活用することができている。今後も継続して活用することで、基本的な表現の理解を深められるように支援していききたい。そして、言語活動の充実を図ることで、生徒一人一人の英語力の向上を図っていききたい。
		日常的な話題や社会的な話題について、情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりする力の定着を目指す。	○ICT機器を活用して、自己の考えや意見を表現する機会を単元のまとめとして設定することで、思考力や判断力の育成を図る。 ○GoogleスライドやJamboard、Flipgridなどを活用しプレゼンテーションの機会を設けて、表現力の育成を図る。 ○「話すこと<やりとり>」を意識した授業展開の研修を進める。	B		様々なテーマを授業で扱うことで、生徒が日常的な話題や社会的な話題についても考えをもち、意見を表現することができている。今後は、単元ごとの指導事項を活用して、より具体的な表現ができるように支援していききたい。プレゼンテーションの活用を通して、表現力の向上に向けた、課題設定をしていきたい。また、即興的なやり取りの場を設定していききたい。中間指導を取り入れることで、活動して終わるのではなく、英語力を適切に習得できるような支援方法の研修をしていきたい。
教務		自らの学習を調整する力の育成を通して、主体的に学習に取り組む態度の定着を目指す。	○学習サイトを用いて、自ら学習内容の定着を図る場を設定し、目標を明確にすることで主体的に学習に取り組む態度の育成を図る。 ○授業で学習した内容の確実な定着と自らの学習を調整する力を育成するために、振り返りの時間を毎時間確保し、次時の学習への意欲の向上を図る。	B	B	学習サイトを活用している生徒が多く、オーセンティックな視聴覚教材を活用することで、単語の理解が深まったり、単語練習フォームや例文練習フォームを活用することで、学習調整力が高まっているようである。自らの学習調整能力を育成することを意識して、今後は主体的に取り組むことができるような課題を作成していききたい。振り返りを活用して見通しをもち、学習に取り組めるような態度を育成していききたい。
		教育課程の工夫改善をする。	○授業時間増を生かした教育課程を作成し、少人数指導やTTを行うことで、学習内容について発展的なものまで扱えるように努める。また、今年度の教育課程を変更した効果について検証する。	B		少人数指導を行う英語、数学に関しては、発展的な内容の指導や習熟度別授業を行うことができた。また、理科と社会で授業を2種類に分けることで分野別に専門の担当者が授業を行った結果、教育効果を高めつつ効率的な授業を展開できた。教育課程を変更した効果の検証は、今後の課題である。
		授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業のアンバランスにも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、授業時数の均一化をはかる。また、夏季課外を円滑に実施する。	B		授業交換を行うことで、自習になる授業を避けることができた。しかし、3学年が完成したことや授業の種類を増やしたことで、授業交換の自由度が低くなり、交換による授業のアンバランスまで考慮することは困難であった。
		授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間授業をより充実したものとするため、研究構想部と協力して、教員相互による授業研究などを実施する。また、ICT機器(タブレット及び電子黒板等)を利用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		学校全体で取り組んだ年3回の授業公開を行ったが、研究というところまでは十分踏み込むことができなかったのが課題である。ICT機器の活用は十分に行うことができた。
		教育活動を公表する。	○学年と連携して、小学生対象の水戸一高附属中説明会、公開授業の実施により学校を公開する。また、情報部と連携して、ホームページを通して、地域住民等に広く水戸一高附属中の教育理念を周知する。	C		水戸一高附属中説明会は、生徒が積極的に関わりながら実施することができた。また、公開授業で学校を公開することはできた。しかし、ホームページを通して本校の活動を周知することについては、保護者アンケートでご意見をいただいたように十分に行うことができなかった。
教務		統合システムを円滑に運用する。	○支援システムの円滑な運用を進めるために、管理体制を見直すとともに、使用法の徹底や活用法の研究をする。システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B		支援システムについては、だいぶ計画的に利用することができている。しかし、効率的に運用して授業研究時間の増加をするところまでは到達できなかった。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○学校行事を適切に配置し、時に臨機応変に対応することにより、各行事の円滑な実施と充実 に努め、新たな伝統の創造を目指す。 ○高校との連携した行事においては、特別活動部が橋渡し役となり、双方に教育的な効果が生まれるよう配慮する。 ○中学独自の行事においては、6年間を見据えた内容になるよう考慮した内容を目指す。	A	A	高校と連携し、＋4学年活動により、米中派遣、文理・融合講座、キャリア探究対話、G R I Tセミナーなど新たな企画を実施した。 クラスマッチ、学苑祭、歩く会についても、実行委員会が中学生を含めた形で始動し始めた。今後も、中高が分断して終わらないように、特別活動部が中心となって連携の橋渡しを行っていく。 中学独自の行事として、駅伝大会を創設した。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○高校と連携した「体験型部活動」の円滑な実施に努める。 ○体験活動を充実させ、選択肢が増えていくよう配慮する。高校との連携においても、双方に教育的な効果が生まれるよう内容を精査していく。			各学年の参加率は、中3の本入部が6割、中2の仮入部が7割、中1の体験型部活動は8割（吹奏楽部を含む）である。サッカー、陸上、バドミントンなど、地域クラブでの活動に参加している生徒が増えてきている。
	学級活動においてキャリア・パスポートを活用する	○各学年の学級活動においてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B		行事ごとにキャリア・パスポートの作成を行っている。今後は活用の仕方についても検討していきたい。
進路支援	生徒一人ひとりが深い自己理解に根ざした高い進路目標を抱くことが出来るように、キャリア教育を推進して進路意識を高揚させる	○進路講演会などの自己理解や進路意識を高めるプログラムを実施し、キャリア教育と進路指導の両面で将来を見据えられる生徒の育成に向けて、指導の充実を図る。 ○高校と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。	B		○各学年進路講演会を、3年生には高校接続に向けて進路集会を企画実施。大学入試に向けての進路意識を生徒に持たせることが出来た。 ○高校との連携に関しては、授業内容の共有や伝達などは、個人や教科任せになってしまっており、課題が残った。
	生徒の学習意欲を引き出し、興味関心や得意分野を生かすことができるよう支援をしていくとともに、学習に対し不安感を抱く生徒への学習支援も展開していく。	○学習に関する各種コンテストや検定等で、他校生と競い合う「他流試合」への参加を促進し、また、全国の舞台で活躍できるように、高校と連携し特設講座等を設けるなどして、同じ目標を持ったもの同士がお互いを高め合う場や機会を設定する。 ○生徒の学習に対するコンプレックスや苦手分野を克服出来るような手立てを講じた特設課外も設定していく。	A	B	○他流試合勉強会、学力向上勉強会を企画実施。他流試合勉強会では高校の教員に専門的内容の指導に入っていた。各種コンテストの参加率は科学系では上昇した ○フォローアップ学習会と称して、学習に不安がある生徒が気軽に教員に質問できる機会を平均月2回実施し、流れを構築することが出来た。フォローアップ学習会は生徒にも保護者にも好評であるが、フォローが必要な生徒の参加率の向上を目指したい。
	学年との連携を図り、生徒や保護者に、機を捉えて適切な進路情報を提供する。	○学年及び高校と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、生徒の現状に合わせた家庭でのかかり方等の情報提供に努める。	B		○学年の進路支援部で連携し合い、よりよい進路指導の在り方について議論出来た。生徒に対しては時期に応じた情報提供や啓発が出来たが、保護者への情報提供は組織だったことが出来なかった。
	6年間を通して見渡せるような進路指導の流れの構築を進め、それらの情報・データを職員間で共有できる環境を整備し、一層の進路指導の充実を図る。	○県内外の附属中学校や中等教育学校の進路指導形態を調査・分析し、本校における高校接続までの進路指導の流れを構築する。また、この分析したデータベースを活用して職員研修等を実施し、指導に有効と思われる形態についても研究を進める。	B		○業者に講師を依頼し模試データ分析会を実施した。また高校にも模試データを回覧し、中高連携の足掛かりとした。来年度は高校に進学する生徒の成績データを活用研究し、より有効な進路指導の研究を進めていきたい。
研究構想	「チャレンジ・プロジェクト」(プロジェクト「図南ジュニア」－21世紀型スキルを備えたリーダーの育成－)を充実させる。	○「心に火をつけるフォーラム」等の行事を通して、自分の在り方や生き方、進路について思考を繰り返して深めていく態度を育む。 ○課題研究や「知道プロジェクト発表会」を通して、自ら課題を発見し、多様な視点から論理的に考察する力や自らの考えを他者に伝える力を培う。 ○将来リーダーとして社会貢献できる人材の育成を目指す。	A		○心に火をつけるフォーラムや＋4学年での各種セミナー受講後に振り返りを行い、自己を見つめて将来を考える事後指導を行うことができた。 ○司書や外部講師と連携しながら研究過程の充実を図ることができた。 ○校内ガイドツアー「水戸への道」やイングリッシュキャンプを実施し、などで学んだことを他者に対して表現する場を充実させることができた。どの学年でも他者意識、社会貢献を高められるようさらに改善していきたい。
	教員の授業力向上を図る。	○「新任者授業見学会」、「校内授業公開」による校内での実践研修および、「茨城大学附属学校等の教育研究大会」等による校外での指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、中高一貫におけるキャリア形成を促す指導やHR経営等の知識や技術を蓄積・継承する。	B		○校内授業公開を各自行い、よりよい提案ができた。 ○県外視察等からのフィードバックや、カリキュラムマネジメントについての研修を行い、教育活動や指導の在り方について研鑽を積むことができた。全体協議での協働的な学びや共有は今後の課題である。
	開かれた学校づくりを推進する。	○「＋4交流」を中心とした中高連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取組を広く周知する。	A	A	○＋4交流において、先輩とともに学ぶ機会を持てたことは将来を見つめる上でよい刺激となった。異なる年齢集団での意見交流やリフレクションを行えることさらに有意義になると思われるので、改善をしていきたい。
	充実した教育活動により、未来を担う人材を育成する。	○「総合的な学習の時間」を通して、進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像について考えを深めていく態度を育む。 ○「道徳」を通して、道徳的判断力や道徳の実践意欲・態度を育む。 ○総合的な学習の時間や道徳などの授業において、中高合同授業を実施することで、異学年間交流を図るとともに、生徒の多面的・多角的な思考力・判断力・表現力を養成する。 ○毎日の学習の振り返りやキャリア・パスポートなどを通して、主体的に学習に取り組む態度や自身のキャリアを形成する力を育む。	B		○総合的な学習の時間では、ゲストティーチャーを招いて探究活動を展開することで、多面的・多角的な視点で思考力・判断力・表現力等を高めた。 ○生徒の実態に応じた共同道徳や学活を複数回実践することができた。 ○道徳の授業担当者をローテーションで行うことにより、多様な視点から授業を展開できた。 ○キャリアパスポートを定期的に実施することができた。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
生徒支援	基本的生活習慣の確立を図る。	○教員が率先して挨拶を励行し、校内外で挨拶しあう態度が自然となるようにする。 ○総合的な学習の時間のテーマ「至誠学」での「まごころをもって役に立つ」姿を発揮し、地域等で進んで貢献・奉仕しようとする態度を育む。 ○水戸一高附属中生として誇りの持てる行動を問い、規範意識の高揚を図る。	B	B	○挨拶の励行やマナーアップ委員による挨拶運動などを通して、挨拶をする生徒が増えてきた。場所や相手を問わず自然にできるようにするにはさらなる働きかけが必要である。 ○様々な活動を通して、進んで貢献・奉仕につながる体験をすることができた。それらを自分ごととして、自分たちで考え、実行できるようさらなる工夫が必要である。 ○学年初めに長期休業前後に全校に話をしたり、各学級で訓話や注意喚気等を繰り返し行った。
	生徒が安心・安全に学校生活を送ることができるよう、連携を取り合い適切に支援する。	○教育活動全体を通して、思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高附属中生としての自覚と責任ある行動を支援する。 ○生徒の心の変化や悩みを把握するためにアンケートや面談の機会をより多く設け、生徒支援上の問題に対して予防的に対応できる体制を整える。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を的確に把握し、生徒の心身の健全な育成を支援する。また、高校とも情報を共有し、多くの教員の目で生徒を見守る体制を整える。 ○インターネットやスマートフォン、タブレット等の適切な使用法を家庭と連携しながら繰り返し指導し、情報モラル意識の向上を支援する。	B		○オリエンテーションや学級活動において構成的グループエンカウンターを取り入れ、人間関係づくりに取り組んだ。他者の立場に立ったりかかわり方を学んだりするピアカウンセリングも計画的に実施したい。 ○毎月のアンケート調査にこころからだのチェック項目や相談希望を追加し、生徒の変化を把握し、早期対応をする流れを構築できた。 ○生徒支援の記録や生徒指導部員による情報交換の場を設け、情報共有と連携した生徒支援の体制ができた。 ○スマホ家庭のルールについて、各家庭で年度初めに見直しを行っていただいた。また、実態に応じた自作資料の作成や外部機関の講習会を計画するなどして意識の向上を図る場を設定できた。
	交通安全の意識を向上させる。	○生徒通学路の安全状況を把握・確認し、関係機関とも連携して生徒が安心・安全に通学できるよう対応する。 ○法規に従った安全な行動について繰り返し指導する。特に、自転車の乗り方については被害・加害両面についての注意を促し、自転車による交通事故ゼロを目指す。	B		○立哨指導などを通して、地域の様子や生徒の登下校の状況等を把握するとともに、注意喚起をすることができた。 ○自転車安全教室の実施、マナーアップキャンペーンでの交通安全の呼びかけ等を行い、安心安全な通学に対する意識づけを行うことができた。
	いじめ問題に適切に対応する。	○生徒と共に歩む教員集団で生徒の看護や協働を徹底し、いじめの未然防止に努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見する手段の一つとして、毎月の学校生活アンケートを実施して生徒の状況を綿密に確認し、それに対して各部署や家庭との連携を図り、迅速かつ適切に対応する。 ○教職員対象の校内研修を実施し、いじめに対する意識を高める。	A		○年度初めに生徒支援方針を確認し、生徒と共に過ごす居場所づくりを推進したことで、未然防止や早期発見につなげることができた。今後は、生徒の主体的な活動によるいじめ防止活動を取り入れる。 ○毎月のアンケート調査に対して、生徒に寄り添い早期対応を実践したことで迅速な手立てをうつことができた。 ○研修会で得た情報を全職員で共有し、いじめに対する意識や適切な対応について、教員の意識改革に努めた。
情報	ICT機器の整備・管理・運用を適切に行う。	○GIGAスクール構想に基づき、引き続き校内におけるICT機器の再編・整備に努める。 ○ICT機器管理室の整備をさらに進め、適切な管理・運用ができるような制度設計をおこなう。 ○高校でのBYODへの移行を円滑に行う。	B	B	○引き続き適切な情報管理に努めていきたい。 ○BYODへの移行は、3年生になる前から計画的な準備が必要であるため、今年度の課題を踏まえて事務とも連携を取りながら今後も検討していく。
	学校WeBページの充実を図る。	○特に、本校の特色ある教育活動についての情報発信を充実させる。 ○WeBページのレイアウトや項目等を見直し、見やすいページに改編する。	C		○学校生活の様子を伝えるブログについては、更新頻度が低い時期があった。次年度は、より頻繁かつ定期的に学校生活の様子を外部に発信できるような手立てを講じたい。 ○WEBページの見直しも含めて今後も随時行っていく。
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○教育の情報化をより一層推進するため、ハードウェア、ソフトウェアの両側面から先生方の支援を進める。 ○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○個人情報の管理やウィルス対策等の注意喚起・情報提供をおこなう。	B		○校務用PCについて台数を優先したため、スペック的には劣るPCがまだ多い。若干数は入れ替えが行われたが、今後もメインメモリの増設やSSD搭載のPCを配備するなど環境の改善が必要不可欠である。 ○スプレッドシートの連絡掲示板を活用し、さらなる情報提供や注意喚起に努めていきたい。
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○より効果的に、学校運営に生かせるアンケートにするため、質問項目を改善する。	B		○Google classroomやClassiを活用して保護者に提出をお願いしたり、保護者からの意見に回答したりすることでアンケート回収率は向上した。より一層、回収率を上げるような対策が必要である。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
図書	図書館司書との連携を深め、自ら課題を発見し学ぶ生徒を支援する図書館として一層の充実を目指す。	○司書との連携を深め、教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出利用に繋げる。 ○選書について、教科担当からも意見を多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ沿い、中学生向け選書にも配慮をしてゆく。	A	A	・今年度も、川又書店の店頭選書を実施することができた。委員によっては、学年でのリクエストを募った結果を反映させた選書ができた。 ・各学年で、総合的な学習の時間に、司書がゲストティーチャーとして、論文検索、論文の作成の仕方、「朝日けんさくくん」や「ナレッジschoolジャパン」の効果的な活用など、丁寧に生徒に指導をしていただいた。
	読書に親しむ環境を整え、読書への啓発活動を行う。	○総合的な学習の時間での利用をはじめ生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むよう、図書室でのPOPや新刊紹介、講義室や廊下に新聞閲覧コーナーや特設図書を設置する。 ○おすすめの本を紹介する等のイベントを感染状況に留意しつつ開催する準備を進め、生徒どうしの読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○図書委員会有志による川又書店の店頭選書、展示を実施する。 ○除籍本をもらい受けて、各学年に朝の読書用に配備する。	A		・廊下に、国内研修旅行や海外研修旅行、講演会など、学校行事に関連する資料や教科、領域等の授業時に必要な資料を複数、準備していただいた。 ・12月、高校の図書委員会主催のビブリオバトルの参加を呼びかけ、中学生が発表者として4人、観客として3人参加できた。 ・川又書店で委員会有志でおすすめの本の展示コーナーを設置、新聞2社からも取り上げられた。
	高校生の委員会と連携し、生徒委員会活動のさらなる活発化を目指す。	○毎日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、生徒委員を主体的に運営できる生徒の育成をめざす。 ○感染拡大により、大きな活動やイベントができないときに備え、より小さな生徒単位で行える効果的な方法について検討、実施を進める。	A		・中学図書委員に働きかけ、子どもたちのアイデアで新たな企画（本の福袋・POPコンクール参加など）を設定、実行できた。 ・図書委員が選書した学級文庫を毎月、貸し出しすることができた。 ・除籍本をそれぞれ学年に振り分け、朝の読書用として整備することもできた。
	機関誌を着実に発行し、本校の歩みを正しく記録する。	○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に行う。 ○図書館報2誌の制作を計画的に行い発行する。	B		・図書部会で、知道会館の紀要や年報など、資料整理を行った。 ・図書館報2誌の制作も、生徒の意向を踏まえ、計画的に発刊できた。
保健厚生	学習環境の整備に努める。	○校舎内外の美化活動の取り組みを推進する。また、各種感染症対策をおこなったうえで、衛生状態が保たれるように取り組みを行う。（教室等のゴミ箱を廊下に出し、ゾーニングを徹底するなど。） ○教室内・各教科準備室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査を実施する。 ○モップ交換や普通教室のカーテンのクリーニング、ワックスがけを行う。 ○施設・設備の安全点検を行い、環境の安全の確保を図る。 ○カウンセリング室の整備継続や感染症疑い生徒の待機場所確保を行う。 ○毎日の健康観察の実施による養護教諭との情報共有。保健調査や各種健康診断等の実施 ○緊急時の各種マニュアルの計画的な見直しと各種研修会等の実施。	A	A	○掃除やモップ交換、ワックスがけを通して学習環境を整えることができたが、感染症対策のためにも、しっかりした取り組みを継続したい。 ○中学棟の廊下は給食の配膳場所であるが、雨天時に体育館との移動経路になってしまうことがあり、衛生状態について配慮が必要と考える。 ○カーテンの破れが見つかったので、扱い方を含め適切な使用をさせたい。 ○トイレの洋式化に伴った清掃方法の検討や清掃用具の整備ができた。 ○今後も、感染症予防の継続が予想されるので、衛生的な学習環境の保持のため持続可能な取り組みについて検討し実践したい。 ○カウンセリング環境が整い利用されている。 ○毎日の健康観察の実施継続とそこから得られる情報の活用を検討する。 ○部員の連携がスムーズで様々なことに取り組むことができた。ありがたかった。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	○健康診断や保健室利用時などの機会を捉え、それらをいかした保健指導を行う。 ○保健体育の学習や各教科、HR、行事等との関連をもたせた、事故・けが等の予防や各種感染症に対する予防を徹底するよう指導する。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラーとの連携を密にして、保健日誌の活用や情報交換、出身小学校との連携等を行うことで、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」の毎月1回の発行。 ○災害時における避難訓練を中高合同で行い、校内の状況と避難経路を確認し、防災に対する意識を高めるよう指導する。引き渡しに関する、中高の基準等について確認し、非常時に備える。 ○中学職員の保健厚生部職員の連携と各種講習会や講演会の実施を積極的に行う。 ○栄養職員と連携し、衛生的で安全な給食指導の実施と食育の推進。 ○アレルギー対応委員会での共通理解や連携を密にし、食物アレルギー生徒の対応を万全に努める。	A		○中高合同の防災避難訓練において不審者対応や地震からの火災を想定した取り組みが出来た。保健厚生部長も参加しての、引き渡しを想定した、方面別集団下校訓練が実施できた。教室配置にあわせて避難経路の見直しや災害時の下校に関する検討を確実に行いたい。 ○生徒希望のスクールカウンセリングが利用されている。生徒支援部との連携の在り方については、本校の今までの経緯も踏まえ、慎重な対応が必要と考える。 ○新入学予定者の健康や生活態度に関する情報の取り扱い、一貫生の高校進学に伴う各種情報の引き継ぎのための方策を早急に検討する必要がある。 ○学校保健委員会を2回開催し、学校医を招いて関連する多方面からの報告・協議などを実施できた。 ○給食の異物混入事案が複数あり、今後も慎重な対応が必要である。 ○生徒に関する、健康面や生活面などの知り得た情報の適切な取り扱いについて、共通理解をもとに慎重に検討する必要がある。 ○必要に応じて、身体測定を行うなど積極的に柔軟な施策がとられた。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
1学年	基本的生活習慣の養成を目指す。	○元気な挨拶を中心とした、何事にも前向きに取り組む態度の育成を図る。 ○学校生活の中で自主的に時間を意識した行動をとり、授業時間や給食の時間の十分な確保を目指した態度の育成を図る。 ○道徳教育を中心として、学校教育全体を通して規範意識の向上を図る。	A	B	○道徳の授業や、学年集会、面談（三者面談）を通して、メリハリのある学校生活を生徒たちが過ごすことができるよう、傾注した。特に、11月の2度目の三者面談は、保護者からも好評であったと同時に、担任が生徒と関わる時間を多く持つことができるよう、差配した。次年度も継続したいと考えている。
	自主的な学習に取り組むと創意工夫のある授業等を通じて、ICTを活用した個別最適化学習を推進し確かな学力の養成を目指す。	○振り返りの時間を確保し、自分の学習についての記録を定期的に見直すことで、取り組むべき課題を明確にし、進んで自主学習に取り組む態度の育成を図る。 ○ICT教材を効果的に活用することで興味・関心の枠組みを広げ、自ら進んで学習内容を掘り下げる意欲を高め、自主的な学習に取り組む態度を育成する。	B		○帰りの会前に、「振り返り（classi）文章作成）」の時間を設けることにより、生徒全員が自己と向き合う機会を持つことができたのは大きな収穫であった。また、ICTについても、総合的な学習の時間や授業で使用した意義も大きいものであった。
	特別活動への積極的な参加を目と同時に、探究活動等を通じて＋4学年活動を充実させる。	○学校行事、委員会活動、体験型部活動等についてのオリエンテーションを充実させることで、＋4活動等を通し積極的に参加とコミュニケーション能力を磨くプレゼンテーションの実現を図る。 ○様々な行事や活動に対する参加の目的や趣旨を明確にすることで、何事にも挑戦しようとする態度を育成する。	B		○「水戸一の道」を進めることにより、生徒たちの愛校心が育つと同時に、他者の前でプレゼンや説明を行うといった今までにない経験ができたことは有難いことであった。生徒の自己肯定感や自信もついたものとする。行事や活動の面においても歩く会や学苑祭だけでなく、英検等に積極的に参加しようとする生徒が多く存在していることも比類ないと同時に、面談等を通して、生徒の心の灯を消さぬよう、普段の日常生活を大事にし、次年度以降も積極的に参加する態度や空気を作り続けていきたいと考えている。
2学年	生徒個々の規範意識を高めるような支援による、自律的な基本的生活習慣の確立を図る。	○日常の挨拶の更なる定着と、場に応じた行動をとれるような支援を目指す。 ○環境整備・清掃活動の励行を促進する。 ○Chromebookの使い方を始め、SNSやICT機器との向き合い方を考え、身に付けられるように支援する。	A	A	○時間・あいさつ・清掃を三本柱とした学年の規律を目指し、学年生徒会からの働きかけを支援した。三本柱にとどまらず、服装・Chromebookの使用・学習時間・就寝時刻等に対する注意喚起も行うなど、よりよい学校生活を送ろうとする生徒による自発的な雰囲気づくりができた。来年度も更なる支援を継続して行いたい。
	自主学習に取り組む態度の育成と、ICTを活用した学習意欲の向上を目指す。	○振り返りの時間を活用して学習記録を定期的に見直すことを通して、客観的データをもとに課題を明確にし、意欲的な自主学習に取り組む態度を育成する。 ○ICT教材を効果的に活用することで興味・関心の枠組みを広げ、自ら進んで学習内容を掘り下げる意欲を高める。	B		○研修のまとめや自己の分析プレゼンテーション等をスライドを用いて行うことで、自ら学習内容を深めることができた。 ○Classiによる毎日の振り返りを積み重ねることにより、学習時間のグラフ化（見える化）を通して、自らの学習に対する客観的な見直しを定期的に行うことができた。来年度も継続した取り組みを続けていきたい。
	特別活動への積極的な参加を促すとともに、様々な体験活動等を通じた学年活動を充実させる。	○学校行事、委員会活動、体験型部活動、＋4学年活動等への積極的な参加を促し、多学年とのコミュニケーションを通して自らの人間性を磨く機会を増やす。 ○語学研修や国内研修旅行を始め、総合的な学習の時間を中心に様々な体験活動を計画・実施することで、充実した学年活動の実現と、学びに向かう力・思考力・判断力・表現力の育成を図る。	A		○探究対話やビブリオバトル等への積極的な参加を促し、多学年交流を進めることができた。 ○語学研修・国内研修旅行以外に、農業体験や美術鑑賞・イングリッシュキャンプ等を通じた体験活動を計画・実施することで、実感を伴った学びの実現ができた。来年度の海外研修旅行・キャリア教育に向けた準備をしっかりとして進めていきたい。
3学年	心身ともに健やかな成長を目指す。	○学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。 ○部活動への参加や校外での活動を推奨したり、体育の授業や日々の運動習慣の習得を意識した声かけをしたりする。	B	B	学校の教育活動全体を通じて、道徳性を養うことができた。しかし、日常生活の様子を見ると、まだまだ改善の必要性も感じる。基本的生活習慣を基盤として、水戸一高生となるために必要な力をもっと明確にし、身に付けさせていくべきである。部活動や体育の授業には率先して取り組み、健康な身体づくりを進めることができた。運動を習慣的に実践できるようにしたい。
	附属中のリーダーとしての活躍を目指す。	○一人一人が附属中学校の最高学年生としての意識を高める。 ○下級生とよいコミュニケーションをとり、リーダーとしての自覚を育む。 ○行事において、これまでの経験をもとに各自がリーダーとしての意識をもち、主体的に取り組むことで、下級生をリードしていく意識をもたせる。	B		中学校の最高学年として、様々な行事や生徒会、部活動等でリーダーとして活躍することができていた。一人一人の生徒たちがより意識を高くもち、水戸一高での活躍のために中学校3年間で活躍の場をもっと設定する必要がある。リーダーとしての自覚をもてる生徒を数多く育てるために、生徒主体の活動がもっと必要である。
	夢に向けた挑戦に取り組む。	○様々な活動(アントレプレナーシップ・プロジェクト、ノウレッジ・プロジェクト、ボランティア・プロジェクト等)を支援して、夢に向けた挑戦を支援する。 ○一人一人の進路実現に向けて、具体的な将来像をもてるような進路支援を行う。 ○日々の振り返りの時間を活用して、目指すべき理想像に向けた取り組みへの支援を行う。	A		自分の得意な分野について様々な挑戦を支援することができた。資格取得のために対策講座を行った。今後も引き続き支援していきたい。3名の生徒がIBARAKIドリームパス本選出場を果たした。茨城県教育委員会主催の次世代グローバルリーダー育成プログラムにも参加している生徒もいる。今後も学校生活だけではなく、生徒たちの興味関心に基づいた活動を周知することで、夢に向けた挑戦を支援していきたい。

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない